しまね読進協

第46号

発行日 平成31年2月20日

発行所 島根県図書館協会読書推進運動協議会部会（松江市内中原町52番地 島根県立図書館内）

平成三十年度 島根県図書館協会の主な事業

◎島根県図書館協会設立五周年記念事業

島根県図書館大会プレ大会

～伝える、本の楽しさ。～

十月十四日（日）くにびきメッセ

全体会　記念講演会

（島根県立図書館建築五十周年記念講演会共催）

第一分科会「観戦！ビブリオバトル」

第二分科会「はじめての読み聞かせ講座」

◎全国優良読書グループの推薦

（公益社団法人・読書推進運動協議会より表彰）

・伯太町子ども読書クラブ（安来市）

◎島根県読書推進運動功労者の表彰

【団体】

・おはなしどんぐり（松江市）

・えんがわ文庫（雲南市）

・おはなしたまてばこ（奥出雲町）

・サークルぶんぶん（大田市）

◎読書体験記の募集

応募数　九編

入　賞　三編

◎「この本いいよ！～島根の高校生・高専生おすすめの一冊～」投稿の募集

応募団体　九学校

応　募　数　六十四点

◎機関誌等の発行・配布

・「しまね読進協」第四十八号

島根県図書館協会設立五周年記念事業 島根県図書館大会プレ大会開催

島根県図書館協会は、平成二十五年に島根県読書推進協議会を母体として設立しました。それから五年、図書館の機能や役割をアピールし、より一層読書普及を目指す取り組みとして島根県図書館大会を開催することとし、本年度はそのプレ大会を設立五周年事業として開催しました。

午前中の全体会は、島根県立図書館の建築五十周年記念事業と共催で、島根県立大学短期大学部名誉教授・藤岡大拙氏による記念講演会を行いました。

午後からは二分科会に分かれました。

第一分科会は「観戦！ビブリオバトル」です。ビブリオバトルとは、発表参加者（バトラー）が読んで面白いと思った本を紹介、その後参加者全員でその本に関してディスカッションして、「どの本が一番読みたくなったか」を基準に投票し、チャンプ本を決めるという「知的書評合戦」です。この分科会は全国高等学校ビブリオバトルの島根県予選大会も兼ねたため、バトラーとして県内の高校・高等専門学校から生徒十名が出場し、参加者約八十名がその発表を聞いて投票しました。最初は二会場で予選を行い、予選を通過した四名での決勝です。チャンプ本は投票の結果、平田高等学校・郷原拓実さんが紹介した、ドリアン助川著『あん』が選ばれました。いずれの発表者も自らの体験を織り込みながら、なぜその本を読んでほしいのかを参加者に熱く語りかけ、発表後のディスカッションタイムでは、多くの質問や意見が出され活発な会となりました。アンケートでも、「発表者の熱い思い、まっすぐな気持ちを共有できて楽しかった」「とても深く本を読みこんでいると感心した」「聴衆の聞く耳、感じる心も試される面白いイベント」など評価する意見を多数いただきました。

第二分科会「はじめての読み聞かせ講座」では、講師に島根県立図書館の読書普及指導員・遠藤雅代氏を迎え、これから読み聞かせをはじめようと思っている方、始めて間もない方々十七名が、読み聞かせの基礎知識や技法について楽しく学びました。また、会場には本選びの参考となるよう、たくさんのおすすめ絵本やバリアフリー図書も展示し、みなさんにご覧いただきました。受講後のアンケートでは「いままでは、これでいいのか？という思いがあったが、学びなおすことができた」「これからも子どもたちの力になりたい」「改めて絵本のすばらしさがわかった」「機会があればまた参加したい」等、多くの感想をいただきました。

島根県図書館大会は、二年後、二〇二〇年度から隔年で開催する予定です。

読書体験記 入賞作品

〈一般の部〉

生涯のしあわせ

山尾一郎（大田市）

『青春を山に賭けて』
植村直己 著
文春文庫

植村直己さんの『青春を山に賭けて』を読むと元気が出てくるのは、なぜだろうか。困難に出会った時に必ず読んできた。不思議と「自分にもできるのではないか」という気持ちにさせてくれる。お会いしたのは講演会で一度だけだが、本は何冊も読んでいる。著書の中で、植村さんが歩んできた道のりが詳しく描かれている。偉大な冒険家と形容される植村さんだが、とても親近感が湧く人である。

植村さんは、大学卒業後ヨーロッパアルプスを見たくて、一九六四年に移民船アルゼンチン丸でアメリカに向かった。ロサンゼルスで労働許可書を持たずにブドウ園で働いていたため、日本に強制送還されそうになるが、何とかフランスに渡ることができた。一九七〇年には、エベレスト、マッキンリーと登り、世界初の五大陸最高峰登頂者になった。その後は、北極圏、北極点、グリーンランド犬ぞり単独行の成功。さらに、一九八二年南極点単独犬ぞり探検を計画したが、フォークランド紛争が勃発したために断念を余儀なくされた。再起をはかる足がかりとして一九八四年二月十二日、マッキンリー冬期世界初の単独登頂を果たしたが、その後消息不明となり、三十年以上が経っている。

しかし、私は植村さんから勇気をもらい続けている。どこにでもいそうな少年が、夢を持つことによって偉大な冒険家になった。学力や運動能力が評価されがちであるが、そんなことが優れていない生徒にとっては、より身近な存在である。やる気さえあれば、何とか道は開ける。自分も大学を卒業すると、フランスのパリからネパールのカトマンドゥーまでのユーラシア大陸自転車横断一万五千キロの旅に出た。

旅の途中、精神的に落ち込むと必ず『青春を山に賭けて』を読んだ。自分の置かれている不安定な精神状態で読むと、モヤモヤした気持ちが吹っ切れた。植村さんは、著書の中では「心の宝」を手に入れるために旅をしていると語る。自分もお金では買えない何かを旅で手に入れたいと思いながら旅をしているが、すばらしい人と出会ったり雄大な自然と出会ったりすると感動する。自転車の旅であれば、ゴールした時の達成感もお金では買うことはできない喜びである。心の宝は、人間の成長にとっては栄養になってくれるのだろう。宝をたくさん手にした人は、きっと人格者として多くの人から慕われるようになるに違いない。

植村直己さんは冒険家ではあるが、多くの人から慕われていた。その謙虚な言動は、極限の世界で格闘した人だからこそ自然に出てくるのだろう。人間は厳しい体験をすればするほど、人には優しくなることが植村さんの著作からも伝わってくる。自分自身は自転車で旅をすることで人に対して優しくなったのかはわからないが、自分が追い込まれた時に、何度読んでも元気をもらえる本と出会えたことは本当に生涯の幸せである。

読書との出会い

加藤富之（益田市）

私が読書に出会って早いもので、四十年の歳月が流れました。幼い頃から本好きではあったのですが、学生時代のんびりと過ごしたせいもあり、読書に関してはかなり無頓着であったようです。

しかし、それが一転したのは高校を卒業して、公務員として働き始めた時のことです。部屋を同じくした一年先輩が、「君は読書をしないのか。私は毎日五冊以上の本を読む。君も読め」「読めと言われても…」。そんな先輩に出会って間もなく「おい、今日はいい天気だな。外は真っ青な快晴だ。絶好の読書日和だな」私は意味が分かりませんでした。「今日は日曜日。おい書店へ行くぞ。ついてこい」先輩はそう言うので、仕方なく市内にある書店へと向かいました。「今日はまとめ買いだ。お前にはこれがいい。ツルゲーネフ、五木寛之、そして曽野綾子に遠藤周作。ついでに三島由紀夫も買うか?」などと言いながら、半ば強制的に買わせると「今日中に全て読むんだぞ。読んだら感想を聞かせろ」「先輩、何でこんなに読むんですか?」私は聞きました。「それはな、読書はしなくても食ってはいける。だがな、人生の深みと言う点では、読む人間と読まない人間では大差がつくんだ。もし自分が年老いた時どうする。路頭に迷った時どうする。その道標となるものが読書なんだ。わかるか?」私は思ったのです。この人はまだ若いのに人生を完全に悟っている。まるで哲学者のようだ、と。

普段はひょうきんで人を笑わせる先輩でしたが、本を読むときになると目つきは真剣です。「おい、この前買った本、全部読んだか?」「はい、読みました」「何が一番おもしろかった?」先輩はとっさに聞いてきました。「初めて読んだので難しかったのですが、

五木寛之先生の本がおもしろかったです」「そうか、良かったな。五木先生の本は、すぐ弱音を吐くお前にピッタリと思ったんだ。いいか、人間はな、生まれた時から、環境も、置かれた立場も違う。健康もだ。先生は言ってるだろ。『人間は生まれた時から全て病気を持って生まれる。それをどう人生に生かすかだ』と」。

あれほど健康だった私が病気がちになったのが三十代の頃からでした。一時は命をも危ぶまれる時期もありました。入院先の病院で毎日思いました。――あの先輩のおかげで今の私がある。読書をしてきたおかげで生きている。勿論、病気を治すのはお医者さんだ。しかし、病気で落ち込んだ心を奮い立たせるのはやはり本以外の何ものでもない。そして何よりも人の気持ちがわかり、やさしくなれる――。自分を注視して客観的に見つめ直すことが出来ました。

先輩に出会って四十年、五木先生に出会って四十年。「人生、思い切って山へ登ったあとは、ゆっくり下山する」先生は著書『林住期』の中でそう述べられています。

酒は人生の肥やしと言われますが、私にとって心の肥やしは本です。本に出会って、今、先輩の言葉が身にしみる秋の季節です。

『林住期』
五木寛之 著
幻冬舎

〈児童・生徒の部〉

一度考えるのを止めてみる

横山 菜々美（江津高校）

私が『アミ 小さな宇宙人』に出会ったのは、高校卒業後の進路に行き詰まっていた時でした。毎日頭の中でぐるぐると思い悩んで、ずっと頭から離れずに、常に体や頭に重りがついているようなそんな感覚でした。しかし、この本を読み、私は少し明るい方へ変わり、重りが体から離れた気がしたのです。

物語の中に出てくる宇宙人アミはこう言っています。

「どうして、実際に起こりもしないことに頭を悩ませて、現在を犠牲にしなくてはならないんだい？」

私ははっとしました。本当にその通りだと思いました。いつも私はまだ現実に起きていない先の事を考えすぎて、どんどん悪い思考回路に陥り、何かをしようとチャレンジする前から、「もうだめだ。絶対無理だ」とあきらめてしまっていました。今まで一体いくつもの自分のチャンスや可能性を潰してきたのだろうと気が遠くなりました。先の事を考える作業は、大切だし多少は必要です。しかし、考えすぎて現在が疎かになってしまうようではいけないのです。考えるのを止めて、何の心配もせずに〝今〟という瞬間を満喫することで幸せに生き生きと輝けるのだと思います。

アミは物語の中で「愛」の大切さについて教えてくれました。私は、愛が無くて攻撃的で否定的な、相手を受け取めようとしていない自分に気づきました。それはなぜか。一番の原因は自信の無さです。私は先の事を考えすぎて思い詰めて勝手に自信を無くしていました。自分自身を否定し、自分の一番の敵となっていました。自分自身を肯定できないのに相手を肯定できるはずがありません。自分自身の中に愛がゼロなのに周りに愛を届けることはできません。どうしたらよいのか。

「自分自身になること」これが大切だと思いました。〝今〟という瞬間を大切にして全力で取り組む。くよくよ考えず何にでも挑んでいく。「自分なんかが」ではなく、自信を持って「自分が」と思えるように、自分が自分の見方でいられるよう「自分自身になること」を目標に頑張っていこうと思います。自分自身がより正しく正直に、より優しく変わる。そして今度はその変化を外に向けることで周りに響いていく。そうすることで心豊かで愛に満ちた気持ちが増えていくのだと思いました。

「きみは今、この瞬間、幸せですか？」この質問に、「はい、幸せです」と皆が笑顔で言える日が来るように、心には愛を。そして現実にまだ起きていないことに頭を悩ませて現在を犠牲にせず〝今〟この瞬間を大切に、全力で取り組む。考え込むのを止めてみる。アミが教えてくれたこれらのことを忘れなければ前向きに自分らしく幸せに生きていけるのだと思います。私はこれからの人生をこれらの事を心に置いて、明るい方へ進んで行きたいです。

（『アミ 小さな宇宙人』エンリケ・バリオス著 石原彰二訳 徳間書店）

平成三十年度 読書推進運動功労者の表彰

公益社団法人読書推進運動協議会から、「伯太町子ども読書クラブ」が全国優良読書グループとして表彰されました。

◆伯太町子ども読書クラブ（安来市）

代表者　山岡　輝美

本クラブは、一九八六年に「読書に親しみこころ豊かな子どもを育てよう」という趣旨のもと、町内の一地区で結成されたクラブから始まり、現在では五クラブが活動を行っています。各クラブは、入会を希望した小学一年から六年までの児童と、リーダー（保護者や小学校の読み聞かせなど地域の読書普及に携わっている者）とで構成されています。

年度初めにクラブごとに活動の計画を立て、毎月定例会を開き、絵本の読み聞かせや本の貸出・紹介、創作活動、レクリエーション、グループ読書等を行っています。また年に一回、五クラブが一堂に会し日頃の活動の成果を発表しています。本クラブが長年にわたり活動を続けることができたのは、本が好きで本に親しみを持つリーダーと、子どもたちの笑顔と、地域の方の支えがあったからです。今後も次の世代の子ども達に届くよう、活動していこうと思います。

島根県図書館協会読書推進運動協議会部会では、読書推進運動のために尽くし、功績が顕著な団体及び個人を毎年表彰しています。今年は四団体を表彰しました。

［団体］

◆おはなしどんぐり（松江市）

代表者　廣江　圭子

平成十八年から現在に至るまで、市内の幼稚園、小学校に出向き、お話（ストーリーテリング）を聞く機会を提供しています。現在会員は十一名です。子どもたちの想像力を養い、やわらかな心や考える力を育み、情操豊かな子どもたちを育成する事業に携わってきた団体です。

◆えんがわ文庫（雲南市）

代表者　金山　由美子

昭和五十七年に掛合町入間地区の保護者で結成され、以来地域を拠点として子ども読書に関わる取り組みを行い、読書推進に大きく貢献しました。現在は二ヶ月に一回、小学生に保育所の子どもたちを加え、絵本の読み聞かせと芋掘りや調理実習等の体験活動を実施しています。子どもの人数が減少し小学校の統合などで保護者の縦のつながりが希薄になりつつある中で、活動を通して保護者同士や親子のつながりを深め、地域に密着した団体となっています。

◆おはなしたまてばこ（奥出雲町）

代表者　細川　千恵

馬木小学校の保護者によって二〇〇一年結成されました。現在会員は十四名です。主な活動として、小学校月三回、幼児園年三回の読み語りの実演と、公民館での七夕会の開催や年一回の研修会を行っています。子どもたちが本の中に描かれる様々な価値観に触れることで、心豊かに成長してほしい、との思いで日々活動しています。こうした取り組みは、より多くの本に親しむ環境づくりの一助となっており、地域の読書推進に大きな役割を果たしてきました。

◆サークルぶんぶん（大田市）

代表者　宮根　悦子

この団体は、地元静間小学校の校長先生の、絵本や本の読み聞かせをして親子の会話を濃くしたいとの思いを受けてスタートしました。現在は六名で「本を好きになってほしい」との願いを込めて活動しています。活動の場所は主に小学校で、週一回、全学年に読み聞かせを行っています。他に保育園でも月一回、読み聞かせをしています。朝の十分間の読み聞かせの時間が子どもたちにとってホッとする楽しい時間であってほしいと思いながら活動を続けています。

この本いいよ！ ～島根の高校生・高専生おすすめの１冊～

今年も県内の高校生、高専生から64点のおすすめの本の投稿がありました。
その一部を紹介します。
※一部編集して掲載しています。

『余命10年』小坂流加

この本を読めば、今私達がどれだけ幸せであるかを痛いほど実感できると思います。

（３年yuzu）

『ゆりちかへ　ママからの伝言』テレニン晃子

「生きること」「生きたいと思うこと」その２つがどれだけ不確定で、ありがたいことなのかをこの本を読んで改めて認識させられました。

（３年芝生）

『終末のフール』伊坂幸太郎

「あと８年後に世界は滅亡します」
そう言われてから５年が経った
仙台市にあるヒルズタウンでのお話。
終わりが見えたからこそ
起こってしまう悲劇
終わりが見えたからこそ
大切にできる幸せ
その２つが混在する世界だからこそ、私たちにとって本当に大切なものは何か考えさせてくれる作品です。

（２年　たまご）

編集後記

島根県図書館協会は、島根県内の公共図書館等、大学・高等専門学校図書館、小中学校・高校の学校図書館の協議団体や、書店商業組合等が加盟し、図書館事業の振興と読書の普及および島根県の文化の向上を目指して活動しています。新しく始まる島根県図書館大会の開催が、加盟団体の連携を強め、県民のみなさまの読書生活と文化・教養の充実につながることを願っています。

（編集員一同）